

言葉の真の力を取り戻すために

参加型システム研究所理事長

神奈川大学名誉教授 橘川 俊忠

◆ コロナが蔓延させる「尖った言葉」

「あいつはビビりだからな」、これはコロナ蔓延に慎重な対応を要求する、ある経営者に投げつけられた言葉である。投げつけたのは、投機的起業家で、若者にも支持者の多い人物である。彼は、「コロナは風邪みたいなもの」と主張するトランプ元米国大統領やボルソナロ現ブラジル大統領ほどではないにせよ、コロナ蔓延防止よりも「経済活動」を重視する論者の一人である。そう言えば、トランプやボルソナロも、検査・隔離・治療を基本とした対策を主張する者を「臆病者」と罵倒し続けていた。

しかし、こういう他者の人格を否定するような汚い暴言を吐くのは、コロナを軽視し「コロナよりも経済」を主張する者ばかりではなかった。ワクチン接種の拡大を図ってきたフランスのマクロン大統領は、ワクチン接種を拒否する人々を「くそくらえ!」（「うんざりさせてやる」との訳もある）と罵ったという。次々と変異株が出現し、感染者数は増減を繰り返しながら、ワクチン接種の進展にもかかわらず一向に収束の気配を見せない。そういう現実が苛立ちを強めているのではあるが、自国の市民に対する言葉としてはあまりに攻撃的すぎると言わざるを得ない。

実際、コロナパンデミックが始まってから、「コロナといかに戦うか」というような戦闘モードの表現が増え、気分も煽られて、国によってはコロナ対応方針の違いが暴力的抗議行動を誘発する事態すら発生している。そして短い「尖った言葉」の応酬が対立をますますエスカレートさせていく。

◆ 短文を好む SNS の世界

コロナパンデミック下で「尖った言葉」は、ツイッターやフェイスブックのような SNS という舞台上での応酬の中で頻出する。先に述べた「尖った言葉」は、すべて SNS で発せられた言葉である。

SNS は、元々簡潔な情報の伝達的手段として開発されたツールだから、長い文章を伝えるには適さない。できるだけ短い文章で、結論だけを伝えられればよしとされる。結論に至る長い思考過程や論理展開を表現することは無用であり、邪魔ですらある。したがって、表明される意見も、過程を省略した結論に限定され、

一方的判断や単なる印象を投げ出したものになるしかない。極端な場合には、「いいね!」の一言で十分ということになる。

そして、そういう一方的判断や印象は、感情の表出になりやすく、感情が強烈であればあるほど使われる言葉も強く鋭い言葉が選ばれる。特に、否定的評価や判断になると、とんでもない罵詈雑言が飛び出すことになりがちである。そこに、SNS に特有な匿名性という要素が加わると罵詈雑言の程度には歯止めがかからなくなる。そうすると、本来、言葉も SNS という通信手段も人と人をつなげるための手段であったが、それが憎悪を生み、それを増幅させ、かえって人と人との間に断絶をもたらし、社会的に深刻な分断を生じさせることになってしまう。

◆ 「寸鉄」の背後に「三省」があるか

ところで、短く鋭い言葉はすべて悪いというわけではもちろんない。「寸鉄人を刺す（殺す）」という成句があるように、短く鋭い言葉は、饒舌な雄弁よりも高く評価されてきた。この成句は、南宋の大儒朱子が、孔子の弟子で弁舌の才を称せられた子貢と、孝の厚さで孔子にも認められた曾子とを比較して、後者をより評価して発せられた言葉であった。『論語』によれば、曾子には、「吾日に吾が身を三省す。人の為に謀りて忠ならざるか、朋友と交わりて信ならざるか、習わざるを伝えしかと」の語があるという。「寸鉄」つまり、一言にして本質を突き、人に反省を強いる語は、毎日三回の反省を要求する自己自身に対する厳しさを持つ者にしてはじめて発することができるということである。

ネット上に氾濫する人の憎悪をかきたてるだけの尖った言葉は、はたしてそのような厳しい自己省察に裏打ちされているであろうか。尖っているだけで内容のない言葉の氾濫は、言葉自体の力を殺いでしまうだけである。しかし、人と人をつなげる力は言葉にこそ宿っている。その力を発揮させるために、今何よりも求められているのは、人の内省する力ではなかろうか。事態が緊急性を帯びれば帯びるほど、その感が強くなる。

（きつかわ としただ）